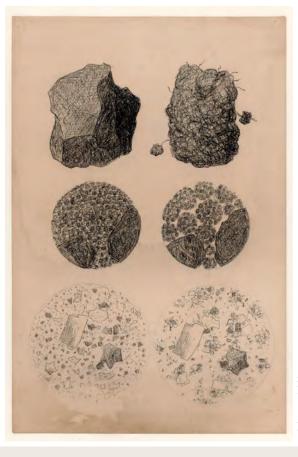
宫沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36 宮沢賢治記念館

☎ (0198) 3 1 − 2 3 1 9 **№** (0198) 3 1 − 2 3 2 0







岩石の風化

■賢治の自筆「教材絵図」

賢治が「羅須地人協会」で、近隣の青年たちに農業に必要な科学の基礎や土壌学を講じた際に自ら作図、利用したといわれています。絵図は、鉛筆の下書きの上に墨や水彩絵の具、クレパスなどを使い、極めて丹念に、そして分かりやすく描かれています。(全49枚 記念館所蔵)

「根毛」

・ 植物の根の形態や内部構造を説明した図。白く細かい根毛の生え方を説明するために背景を黒く塗っている。 「岩石の風化」

左列は新鮮な、右列は風化した安山岩。上段が肉眼、中断がルーペ、下段が偏光顕微鏡で見た図。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

岩手大学 教授 伊藤菊一



2020東京オリンピックの閉会式で賢治さんの「星めぐりの歌」がフィナーレを飾る姿を見て、胸が熱くなった方も多かったのではないでしょうか。閉会式のコンセプトは「Worlds we share」とのことで、世界

が「worlds」として複数形で表記されています。

賢治さんは農民芸術概論綱要の中で「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と語りました。ここで、「世界がぜんたい」を「世界ぜんたいが」としなかった理由は、賢治さんの考えていた「世界」は、単数形の「world」ではなく、複数形の「worlds」であったのだと思います。こうした賢治さんの願いがオリンピックという平和の祭典で、全世界に発信されたことを嬉しく思います。

私が賢治さんを身近に感じたきっかけは、高校 生の頃、田口昭典先生から化学を教わったことで した。田口先生は「あるびれお通信」を通して、 賢治さんの思想や精神を語り続けた賢治研究者でもありました。田口先生は、授業の冒頭に賢治さんの作品を自らがガリ版で印刷した資料を配布して我々に内容を平易に解説して下さいました。高校生であった私にとって、田口先生の授業スタイルは不思議な雰囲気を持つものでしたが、学問としての化学だけでなく、賢治さんの独特な世界に魅力を感じたことは間違いありません。田口先生は盛岡農林専門学校農芸化学科の卒業生でしたが、田口先生の授業から影響を受けた私も岩手大学農学部農芸化学科に進みました。

大学では分析化学実験を亀井茂先生に教わりました。亀井先生も精力的に賢治研究を行っておられた先生でした。当時の私にとって興味深かったことは、田口先生と同様に、亀井先生も冒頭の時間を使って、自らがお作りになられた賢治作品のプリントを学生に配布し、先生ご自身が朗読をされていたことです。このように若く多感な時期に、賢治さんを深く理解されている先生方から様々なことを学ぶ機会があったことは、幸運と言うほかありません。

その後、私は縁あって母校である岩手大学農学部の教員となり、ザゼンソウ(座禅草)という春先に開花する発熱植物の研究を始めました。ザゼンソウの魅力は、自らが発熱することでその環境を積極的に変えることにあります。これも今振り返ると、研究を始めた当時の私の中に「グスコーブドリの伝記」が無意識としてあったのかもしれません。その後、しばらくの間、発熱植物研究に没頭する日々が続き、賢治さんからは少し離れておりましたが、2018年に賢治さんの得業論文と向き合うことになりました。

賢治さんは大正7年(1918年)に『腐植質中ノ 無機成分ノ植物ニ対スル価値』と題する得業論 文を提出し、盛岡高等農林学校を卒業しました。 2018年は賢治さんが論文を提出してから100年目 の節目の年で、農学部附属農業教育資料館で企画 展を行うことになり、当時資料館長を務めていた 私は賢治さんの得業論文を改めて真剣に読んでみ ようと思いました。大学の教員をしている私は、 毎年のように学生さんが提出する卒業論文、修士 論文、あるいは、博士論文を読む機会があります が、賢治さんの得業論文(現在の卒業論文に相 当)を現代の学生が提出する論文と並列する形で 読もうと思った訳です。得業論文の解説は『賢治 学 第6輯 特集 宮澤賢治得業論文100年』に記述のとおりですが、賢治さんの自筆の論文に書かれ



岩手大学農学部附属農業 教育資料館(撮影:伊藤)

業論文を読むと、執筆した学生本人が目の前に現れ、自らの言葉で語っているという感覚を覚えます。興味深いことに、100年前に書かれた賢治さんの得業論文を読んだ際にも同様の感覚を覚えました。私が賢治さんの得業論文から受けた印象は、「自らの論理展開に対する揺るぎのない自信」です。これは、おそらくは賢治さんが盛岡高等農林学校を卒業してからも、賢治さんの心の中にあり続けたもので、賢治さんの様々な著作や人生の通奏低音の一部になっているように思います。

このように、賢治さんの得業論文を現代の学生さんの論文と共に読むという経験は、「令和の時代に大学で学ぶ学生さんは可能性ある未来の賢治さんである」という気持ちを私に強く抱かせるものでした。賢治さんのようで、賢治さんとは違う、未来の新しい時代の風をもたらす若者は実は我々の目の前に大勢いるかもしれないのです。

2021年7月に岩手大学は、2030年を見据えた 大学の目指すべき方向性を『岩手大学ビジョン 2030』として策定しました。このビジョンの中では、 「卒業生である宮沢賢治の想い『世界がぜんたい 幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない』 (Well-being)を受け継ぎ、誰一人取り残さない 持続可能な社会の実現を目指し、予測不能な時代 を切り拓き、力強く生きる力を持ったレジリエン トな人材の育成を通じて、社会に貢献します」と 述べられています。

私も賢治さんの後輩として、微力ながら、賢治 さんの思想を次世代に継承するための役割を果た したいと思っております。

まばゆい気圏の海のそこで...

画家・絵本作家 いせ ひでこ



賢治の童話は絵描きを夢中に させるが、実はその作品世界を 絵で表現することはとても難 しい。

賢治がすでに言葉で絵を描い ていたからだ。

それでも、私は4冊の絵本を

描いて来た。

『ざしき童子のはなし』『よだかの星』『風の又 三郎』『水仙月の四日』。

賢治を追う旅は見えないものを探す旅

九月一日の谷川の小学校やサイカチ淵、そらの 散乱反射のなかひかりの微塵系列の底に澱む岩手 山や象の頭の形をした雪丘。これら見えるものは 全て取材しスケッチし身体に刻みこめる。

では、見えないものはどうする?

ざしき童子、いまでももえているよだかの星、 二百十日の風と又三郎、ヒノキを渡る風、雪雲か らチラチラする雪狼の黒い足.....

そして音なき音は?空の仕掛けが外される音、 星座の瞬き、雨上がりの森のうるうる、風が揺ら す芒の「あ、西さん、あ、東さん。あ、南さん」、 ガラスのマントのギラギラ......

ある年のまだ雪の残る春、ざしきぼっこに会いたくて、佐々木喜善の『奥州のザシキワラシの話』を手に遠野を旅し、曲り家をスケッチし、岩手県北の金田一温泉の「緑風荘」を目指した。ざしきぼっこが出るという旅館だ。その村は時間が止まったまま古い襦袢のような桃色の空気に沈み込んでいた。ヤドリギのまりをいっぱい背負ってクリの木が倒れそうに1本立っていた。私は誰も見ていないことを確かめて木に登りかろうじて一枝のヤドリギを手にした。晩年の賢治が病床から飛翔を願い欲したやどりぎ、「水仙月」ではいのちの象徴。ざしきぼっこに会えますように_____願いをかけた。

緑風荘で案内された「槐の間」は長い長い廊下の底にあった。廊下の外には、ヒノキに囲まれた庭に小さな祠が見えた。穏やかな夜だった。床の間にお菓子を置き、スケッチ帖と鉛筆を枕元に置

いて布団に入った。部屋の柱の「槐」の節くれが 鬼の顔に見える。

0時を過ぎたころ、突然庭のヒノキがごうと鳴り廊下の反対側から、得体の知れない「気配」が ひたひたと私の部屋に向かって渡って来た。

カタンと障子が開くと部屋の空気がポッ、ポッ、パリンと音を立てて割れた。4回目の大きな乾いた音がすぐ耳元でパリン!と弾けると、同時に私の両手は何かに激しく叩かれ、引っ張られ、次の瞬間にはその存在感を失っていた。

両腕を肩から持って行かれ、スケッチどころではない。目だけをりんりんと張ったまま天井を見つめていたら、白い着物を着たおかっぱの子どもが天井から私を見ていた。なすすべもなく私はざしきぼっこと対峙していた。…やがて、鳥の声が聞こえ出し、空が明けはじめた。午前4時。両手は自由になっていた。恐怖よりも、ざしきぼっこに会えた喜びの方が大きかった。

ゴッホと賢治の共に37年の生涯に様々な共通点 を見出していた私は、1995年頃からオランダ、フ

ランスとイーハトーブを 行ったり来たりしていた。

糸杉はヒノキに、オリーブ畑はりんご園に、アルピーユ山脈は奥羽山系に、「星月夜」は「よだかの星」に、ゴッホの壺に入れた「ひまわり」は賢治の「すがれのひまわり」に重なっていた。



そして2000年の夏もフラ ふたりのゴッホンスから直行するように岩手県を訪れていた。

旅には必ず異世界への入口が用意されている。 小岩井農場からふと紛れ込んだder heilige Punkt のことは忘れられない。本部の気取った建物やロ ビンソン風力計のある観測台のわきを通り灌木の 森を抜けると、一面黄金の麦畑が広がっていた。 刈られた麦畑の落穂を目指してカラスの群が舞い 降りてきた。突然、空は低い鉛の雲に覆われ、大 粒の雨が降り出した。

スケッチ帖を閉じて顔を上げると、奥の森から 自転車を漕いでくる雨合羽の農夫が現れた。もの すごい勢いでこちらに向かって走って来る。道に 立っている私のことは全く目に入っていない。私 が避けなかったら、体当たりしていただろう。

草地の黄金をすぎてくるもの ことなくひとのかたちのもの けらをまとひおれを見るその農夫 ほんたうにおれが見えるのか

要神の森の梢からひらめいてとびたつからすの群と麦畑は、1890年にゴッホが北仏オーヴェールで描き残したタブロー『カラスの群れとぶ麦畑』そのものだった。なんと、ここに来る直前ゴッホの終焉の地オーヴェールでゴッホの墓を訪ね、黄金いろの麦畑をスケッチして来たばかりだった。

賢治の「空」に私たちには想像できない領域がある。そら、虚空、天、宙、穹、孔、鏡、板、天椀、 天盤、空……色を変え形を変え呼称を変え、童話 や心象スケッチに広がる無限。

『水仙月の四日』はその無限から湧き出る雪の物語。宝石のような言葉は美しすぎてしばらく酔いしれた。そして我に帰った。私は絵を描かなければならないのだ。ならば、雪の表情を全て描こう。雪嵐にもまかれよう。天気予報で調べ4月の最後の吹雪を求めて八甲田に向かった。

雪花石膏の雪野原に群青の空から落ちてくる 真っ白いさぎの毛のような雪。カタッと音を立て て外された空の仕掛け。風が細かい灰色の雪を運 んでくる。雪婆んごと雪狼が狂ったように駆け巡 る。丘だか雪けむりだか空だかさえもわからない 吹雪。子どもは雪に埋もれる。その上に雪は夜じゅ う降って降って降った。

やがて、桔梗色の天球に一面の星座が瞬く。東の空に黄ばらの日の光。10種類以上の雪と空の表情(温度も湿度も)を、手漉きの和紙、画用紙、アクリル絵の具、水彩、鉛筆など、全て画材を変えて描き分けた。

空の異界から雪童子が投げてよこしたヤドリギの意味は大きい。晩年の賢治の言葉___ 「もし三月来られるなら栗の木についたやどりぎを二三枝とってきてくれませんか」

賢治はよだかの飛翔を夢見たことだろう。しかし奇跡は起こらなかった。空の無限は「よだかの星」の位相につながっていた。「よだかの星」は、晩年のゴッホがサン・レミの療養所で描いた「星月夜」との比較論でしか語れない。が、その論はまた別の機会に譲りたい

「農民芸術」の理想郷を追い求めて

群馬大学 准教授 市川寛也



大学生の頃、「農民芸術概論 網要」を初めて読んだ時の衝撃 は今も鮮明に覚えている。それ までは、「銀河鉄道の夜」をは じめファンタジーの世界を美し く描き出した作家として認識し ていた私にとって、そこに記さ

れた芸術論は「宮沢賢治」そのもののイメージを 大きく塗り替えるものであった。その後も、この テキストは研究や実践を貫く軸となり、ことある ごとに読み返している。

そもそも、私がこの言葉と出会うきっかけとなったのは、鶴見俊輔の『限界芸術論』(1967)を通してのことである。非専門的芸術家によってつくられ、非専門的享受者によって享受されるものとして論じられる「限界芸術」という考え方は、芸術学専攻に所属していた私の芸術観を大いに攪拌した。その中で「限界芸術の作者」として挙げられていたのが宮沢賢治である。そこでは、『農民芸術概論』の注釈の形を取りながら、「芸術をつくる状況」「芸術をつくる主体」「芸術による状況の変革」という3つのモメントから分析している。

とりわけ「芸術をつくる主体」の項に挙げられた「職業芸術家は一度滅びねばならぬ」というフレーズにはくぎ付けとなった。「なんと激しい主張だろう」と驚き、思わず原典を確かめた。そして、童話作家としてではない側面について認識を改めた次第である。さらに、時期を同じくして、とある授業で課題図書となっていた高木仁三郎の『市民科学者として生きる』(1999)を通して「羅須地人協会」にも触れることとなる。それを以て「自らの人生をまるごと賭けての『実験』」(高木、1999、p.124)とする見立ては、「ヴィジョンによって明かるくされた行動」(鶴見、1967、p.63)として広義の芸術を捉えた鶴見の論点と相俟って、宮沢賢治に対する興味の芽は大きく膨らんだ。

ここで「羅須地人協会」の案内文を援用するならば、まさに「われわれはどんな方法でわれわれに必要な〈芸術〉をわれわれのものにできるか」という問いが導き出される。私が学生だった2000年代半ばは、日本各地で芸術祭やアートプロジェクトが打ち上げられていた。それらは、公共空間

に作品を設置したり、制作のプロセスに住民が参加したりすることによって、人々が日常生活の中で芸術と出会う回路を増やすことを可能にした。一方で、そこで主役を張るのはあくまでも芸術家の名前と紐づけられた作品である。無論、その作者すべてを「職業芸術家」と同一視するわけではないが、「芸術は誰のものか」という疑問はあり続けた。当然のことながら、それは特定の芸術家のものではないはずである。

しかし、「農民芸術概論綱要」が記されたとされる1926年から100年を迎えようとする今もなお、芸術は特別な誰かのものであり、ほとんどの人々にとっては遠い存在となっている。そのようなもやもやとした気持ちを抱えながらも、私の主たる研究テーマは「妖怪」へと移行していった。芸術学の研究対象として妖怪を位置づけるために、地域文化として妖怪がつくられていくプロセスを明らかにしようとする試みである。茨城在住だった私が頻繁に岩手に訪れるようになったのも、その調査の一環としてであった。

調査を進める過程で、金ケ崎という町で「妖怪」 にスポットを当てた企画を実施しているらしいと いう噂を耳にする。金ケ崎には、かつて仙台藩の 要害があり、現在も往時の町並みが残されている ことから、国の重要伝統的建造物群保存地区(伝 建群)にも選定されている。このエリアの公開住 宅にて、住民が描いた妖怪画などを展示する「幽 霊・化け物・妖怪画展」が開かれている。既存の コンテンツに依らず自由気ままに表現されたイ メージに興味を持ち、夜行バスの「イーハトーブ 号」に乗ってしばしば通った。

しばらくは年に数回程度の訪問だったが、ひょんなことから東北(と言っても山形)に転居することになったため、今度は教員として学生を引き連れて岩手に出向くようになる。そんなある日、伝建群にある一軒の侍住宅が空き家になるという話が舞い込んだ。地元の方と話し合いながら活用の方針を探っていく中で、かねてより興味を抱いてきた「農民芸術」の言葉が脳裏をよぎる。金ケ崎の伝統的建造物は、生活空間と生産空間が一体となった「半士半農」を特徴としており、敷地内には小さな畑もある。

ややこじつけではあるが、すぐそばを北上川が流れている環境も手伝い、現代の「羅須地人協会」を設立しようとする壮大な妄想が始まった。2018年より、当該物件を「金ケ崎芸術大学校」と名付け、生活そのものを芸術とするための実験に取り組ん

でいる。裏の畑で 整を育てたり、する 節ごとに変化する 庭を眺めたり、った り、それぞれの得 意なことや興味の



金ケ崎芸術大学校 外観

あることを持ち寄りながら学びの場を組み立てていく。まだまだ道半ばだが、誰人もみな芸術家たる感受をなせるような理想郷を追い求め、これからもささやかな実践を続けていきたい。

語い

一賢治が繋ぐ心と心一

賢治さんの「セロ弾きのゴーシュ」との出会い

大型布絵紙芝居 萩原陽子



私は、小学校の読み聞かせを 永年続けています。月に1度は 個別に担当。秋には、全員でお 楽しみ会を。

そんな私は、手芸が好きで趣味を生かして何か作ろうと思い立ち、試行錯誤の末、大型布絵

紙芝居「かさこじぞう」を完成させました。立体

感と大きさで、良く見えると大成功でした。娘の勧めもあって出品した2011年「第21回ホビー大賞」で、文部科学大臣賞を頂きました。東京ビックサイトで表彰、展示されました。これが励みになり「そんごくう」「さんびきの子ぶた」「白雪姫」と年1作品を作り、5作品目に選んだのが、大好きな「セロ弾きのゴーシュ」です。これはアニメにもなり、本も出版されています。どうしてもこの絵を使わせてもらいたく、出版元に連絡して許可を頂きました。

そして、布のぬくもりと語りの楽しさを伝える

という活動を地域でも始めました。前4作と違い、 ちょっと高度かなと思いましたが小学校はもちろ ん幼稚園、お年寄りの集まりでも大変喜ばれ、み んな布絵にさわって笑顔になります。

そんな時、なんと原画の才田俊次さんのサイン会に招待され、東京丸善に行き、ご本人そしてアニメ制作者の皆様から「いい作品だから、これからもがんばれ」と励まされました。

この作品を花巻で、という夢を持っていたところ、故郷岩手に行くという友人が原稿を持って仲立ちを買って出てくれました。そしてなんと、「賢治の世界」セミナーに3度も呼んで頂くという名誉に恵まれました。2015年八幡小学校、2018年若葉小学校、2019年花巻小学校。児童や先生方皆さんの賢治愛が伝わってきました。その際、記念館の方に文章を短くした許可を得、その後行くたびに温かく迎えて頂きました。本当にありがとうございました。

「セロ弾きのゴーシュ」を演じるたびに花巻での楽しい思い出がよみがえり、作ってよかったと心より思っています。

私は、本の朗読と読み聞かせと、1年間ラジオで語った民話などを録音してCDにし、時々聞いています。賢治さんの「よだかの星」も大好きな作品です。その中で、お日さまの言葉「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらかろう。…」ここでいつも胸が熱くなります。ああ、わかってくれる人がいるんだと思うと、よだかも救われた思いになったことでしょう。賢治さんの広い思いやりの心の言葉のような気がします。最後の方の「ただこころもちはやすらかに…」の文章には賢治さんの愛を感じます。

その後、「さいごのまほう」「多胡碑と羊太夫伝 説」を加え、全7作品を作り、多くの皆様に観て



布絵「セロ弾きのゴーシュ」

した。好きなことを続けて、人に感動を与え喜ばれる。こんなうれしいことはありません。コロナ 禍の今、いい潮時になったと充実感に浸っており ます。そして、ずっと協力してくれた主人には、 心より感謝しています。

賢治が見たイーハトーヴの星々



一戸町観光天文台 台長 吉田 偉峰 私の職務は、端的に言えば星空を見せる仕事である。岩手の地で星空を生業とする者にとって、宮沢賢治ほどありがたい郷土の偉人は他にいない。『銀河鉄道の夜』に象徴される独特の世界感は、星空観望という非日

常体験の主題そのものである。賢治が憧れた天体 望遠鏡で、イーハトーヴの星空を楽しむ時間は、 この上なく贅沢なひと時である。

現在、私達が見上げている岩手県内の夜空は、 全国と比較しても良質な星空環境に分類される。 奥羽山脈や北上高地には、国内屈指とも称される 観測地が多数点在している。その一方で、光害の 著しい都市中心部では、賢治が見上げた当時とは 比べ物にならない程に、街明かりが溢れている。 現代の盛岡や花巻の街中からでは、先人の想像を 掻き立てた満天の星々を感じる事はできない。

宮沢賢治が青春を謳歌していた頃、岩手県内の都市部では電灯やガス灯の設置が始まっていた。 旧来の行燈や篝火のやさしい灯りが近代の街路灯に置き換えられ、賢治年表の進行と共に、岩手の夜空は明るさを増したに違いない。同年代に記録された盛岡における毒蛾の大発生もまた、近代化と共に引き起こされた光害の証左である。郷里の発展と共に消えゆく星空を、宮沢賢治はどのような感慨を持って見つめていたのだろうか。岩手の星空環境が激変したこの頃に、『銀河鉄道の夜』の初稿が執筆されている。街明かりにかき消される以前の、イーハトーヴの美しい星空の記憶こそが、遺作に込められた本質ではなかろうか。

数名の同志と共に盛岡星まつりを企画し、星空環境問題の普及啓発を始めたのは2007年の事である。当時は街中での天体観察イベントに対して『星が見えない星まつり』などと揶揄されていた。しかし、地道な草の根活動の継続を通して、夜空の環境問題は天文愛好家だけでなく、一般市民や行政機関にも認知されるようになった。近年では、光害に対する認識は、多くの環境問題同様に常識

となりつつある。

『イーハトーヴは、どこでも銀河が良く見える。』

夢想家の戯言から始まった理想の星空の追求は、同じ想いを抱く星仲間の協力を得て、全国レベルで展開を始めた。我々の星空環境保全の取組みは、宮沢賢治作品を育んだ本当の星空を取り戻すための活動でもある。日々の僅かな時間でも、星々や銀河を想いながら節電、消灯、減灯することが、星空を愛する者達にとっての幸いとなる。

イーハトーヴに相応しい満天の星々は、遠くない未来の透明で清潔な風の中にある。



全国屈指の星空が残る一戸町観光天文台

来館者の声

記帳ノートから

No.401~404(令和元年10月5日~令和2年3月1日)

コロナ禍の今、「来館者ノート」はNo.404で休止しています。 (令和3年9月現在) 皆様の「声」は、記念館にとって大切な宝物です。 一日も早いノートの再開を皆様とともに待ちたいと思います。

一崎から夫婦で来ました。30年ほど前に子どもたちと 一緒に来たことを思い出し、感慨深いものがあります。 宮沢賢治は、私たちにとって"心のふるさと"のような気 がします。再び訪ねられて、幸せでした。

中国から彼女と一緒に来た。とてもいい天気、景色。 ほんとうにいい街。彼女と賢治さんの話をいっぱい した。

EX治さんの作品は、成長過程で何度も読み返し、その **又**伝えんとすることがその都度変わって見えるプリズムのようなものばかりです。今日、賢治さんのバックグラウンドを知ることで自分の心象にも似たものを感じ、大変感動いたしました。前回の訪問時(小学生)の記憶はほと んどありませんが、館内の展示の配置にとても感銘を受けております。分野横断的に、日々「宇宙」「科学」「農」「宗教」、そして「芸術」に思いを巡らせていた賢治さんの心象にとてもマッチしていると思います。必ずまた来ます。(山形県)

イスラエルの友人と来ました。彼女も賢治に関心を持ち、イスラエルに帰ったら、ヘブライ語で翻訳された本を読むといっています。賢治の農民への思い、農業改革への情熱、世界の平和なしには個人の幸せはないと、彼なりの思想で精一杯の努力がなされたのに志半ば終ってしまったのが残念です。偉大な天才、長生きしてもっと日本のために尽くしてほしかった。彼の無念さが心に響きます。賢治の思いを次の世代に繋げたい!感謝でいっぱいです。

上大 玉県から初の岩手旅行です。小さい時から繰り返し 可 読んできた宮沢賢治の作品世界が目の前に広がっています。童話も詩も音楽も、そのすべてのイマジネーションの源がこの「イーハトーヴ」なのだと、今日体感しました。宇宙や科学など、様々な視点から賢治に迫ることができ、大満足です。企画展「貝の火」の草稿や愛用品のチェロなど、賢治の息遣いが感じられました。たくさんの皆さんに、ほんとうのさいわいが訪れますように。

十一島県から来ました。宮沢賢治の著作をいくつか読んで、 一田ある意味、突飛な空想・ファンタジーの世界を描く 作家とのイメージを持っていました。しかし、展示を観て、 賢治という人は決して空想のみに生きていたわけではなく、 農民として、学者として・・・地に足をつけ現実を生きながら、その一つの発露として創作に打ち込んでいたのかな、 とそんなことを思いました。とてもいい記念館ですね。コロナを吹き飛ばし、また温かい時期に来たいです。

「賢治の世界」セミナー 2021

11年目となる当館主催事業「賢治の世界」セミナーは、今年度市内18校19会場(昨年度実績:13校15会場1,585名)で開催することとなりました。コロナ禍により、昨年度同様県内に限定した講師陣は、新たに次の3氏を加え、一層充実した布陣となりました。

- ○岩手大学農学部長 教授 伊藤菊一氏(農業)
- ○県自然公園保護管理員 望月達也氏(復興)
- ○写真・随筆家 奥山淳志氏(イーハトーブ) また、第1回目の南城小学校では、今まで一人

人形紙芝居で多くの子どもたちを楽しませてくれ

た星鴉宮さんが、本 セミナーでは初の試 みとなる賢治落語 『月夜のけだもの』 を披露して下さいま した。子どもたちは、



初めての落語に緊張し、笑うタイミングがなかなかつかめず、とても静かな?雰囲気での落語でしたが、事後の感想は「また聞きたい」という声が多く、大好評でした。

コロナを吹き飛ばし、ゆったりじっくり、そして思いっきり「賢治の世界」に浸れる時間が戻ってくることを願いつつ、講師の皆様のお力添えを頂きながら、事業を進めていきたいと思います。

[賢治の世界] ワークショップ

初夏の胡四王山散策

好評を頂いております恒例の胡四王山散策。今年も6月26日(土)、 爽やかな初夏の風に包まれながら、定員超えとなる22名の皆様が胡四王山の豊かな自然を堪能しました。

お馴染となった森林インストラクター髙橋修さんの軽妙でわかりやすい解説に、五感をフル稼働させていました。ブナやホウの木などの木々や草花のにおいや味まで吸収しようとする姿に、思わず微笑んでしまいました。

締めは、山頂胡四王 神社からのイーハトー ブ眺望。コロナ禍の息 苦しさを吹き飛ばして くれるような絶景に感 嘆の声が上がりました。



日々変化する胡四王山と賢治の世界をあらためて 満喫できた一日となりました。

賢治ゆかりの紫波町を訪ねて

7月25日(日)には、①賢治の初恋 ②親友 藤原嘉藤治 ③作品(詩歌、『風の又三郎』、五郎沼の詩・・・)④父方、母方の祖母の出生地 等々でたいへん宮沢賢治と関わりの深いお隣紫波町を訪ねました(参加者12名)。

当日は、天候にも恵まれ、NPO法人「ポラーノの広場」代表理事 瀬川正子さんの懇切丁寧な 案内と解説により、日詰駅前の賢治歌碑から、当

初予定になかった五郎 沼の満開の古代ハス、 城山公園の賢治詩碑、 そして藤原嘉藤治ゆか りのビューガーデンま でを巡りました。



とりわけ、賢治と出会って100年となる親友・藤原嘉藤治の生家跡と歌碑のあるビューガーデンでは、二人の交友関係や「嘉藤治なくして賢治は語れない」とまで言われる親友の生き様にもふれることができ、参加の皆様も静かに二人の縁に思いを巡らせていました。たいへん貴重で有意義な機会になったことと思います。

「特別展》変更のお知らせ

コロナ感染拡大による岩手県緊急事態宣言発令 により、当館はただ今臨時休館となっています(令 和3年9月20日現在)。

それにともない、前号でお知らせしております 当館特別展「賢治の祈り」の開催日程の変更が余 儀なくされています。今現在の予定をお示しいた しますが、今後の推移が不透明であることから、 ご来館される前には必ず当館ホームページ等での ご確認をお願いいたします。

特別展「賢治の祈り」

第 I 期 「羅須地人協会」 終了 第 Ⅱ 期 「雨ニモマケズ」

期間

再開日~令和4年1月30日(日) <記念講演会>

林風舎 代表 宮澤和樹氏 本年度中止

<「雨ニモマケズ」手帳の公開> 本年度中止

<自筆教材絵図の実物公開>



17-24枚目

※ 当館ホームページにてお知らせします。

② 1 月22日(土)~ 1 月30日(日) 25-32枚目

第Ⅲ期 「農民芸術」

最後となるⅢ期目は、33枚目から49枚目までの 絵図の紹介と、賢治が思い描いた農村への祈りや 願いとはどういうものだったのかを「農民芸術概 論」を通じて言及していきます。

|期間| 令和4年2月5日生~5月8日田

<自筆教材絵図の実物公開>

① 2月5日(土)~2月13日(日) 33-40枚目

② 4月29日(金)~5月8日(日) 41-49枚目

編集後記

地元の大学に教職を目指す女子学生がいる。秋田生まれの彼女は、幼い頃母親の読み聞かせで賢治と出会う。その時、漠然と賢治の言葉の使い方に"変な面白味"を感じたという。そんな彼女が、演習「賢治で花巻を発信しよう!」で、『賢治のオノマトペを探究し、その成果でカルタを作成して、修学旅行先でばらまこう!』という単元企画書をプレゼンしてきた。うれしかった。オノマトペへの着眼、カルタに飛ぶ発想、そして何より幼い頃の"変な面白味"が起点にあることが。編集子が担当する「賢治の世界」セミナーも然り!「子どもたちと賢治の出会いの場の創出」という播種に一層意を尽くしたい。何を感じ、その種をどのように育てていくのか、それは一人一人の子どもたちなのだから。